

研究ノオト

——「抱負」も交えて

清水 隆

George Robert Gissing (一八五七—一九〇二) と言う作家の名前を初めて耳にしたのは、丁度、満四十年前の秋、学部 of 二年生の時、当時東京経済大学教授大竹勝先生の「アメリカ文学史」の講義の中でであった。

そろそろ卒業論文の準備に取り掛かろうとして居た時期で、主に O. Henry に興味を抱き、五、六篇の短篇を読んで居たのである。講義が終わった後、大竹教授に相談に赴いたところ、何故 O. Henry かと問われて、彼の *ironical wit* に満ちた短編技法に自らの東京生まれの東京育ち特有の洒落気が *match* して居るのでと答へ

研究ノオト——「抱負」も交えて

ると、それなら英国にも O. Henry に匹敵する技巧的な短篇を得意とする作家が居ると言つて紹介されたのが George Gissing その人であった。早速、彼の短篇集 *The House of Cobwebs* (一九〇六) を図書館から借り出して読んで行くと、O. Henry とは一味違った、所謂、「人間臭い」人物達が多数描出されて居て、一気に魅せられて了ったのであった。次の短篇集 *Victims of Circumstance* (一九二七、何と気の利いた *title* かと当時驚嘆したことを今も憶えて居るのだが) を読む内に、その巻頭の解説に Gissing の本領は短篇小説に非ずして二十

篇以上の長編小説に在ると知って、直ちに前期末の傑作 *New Club Street* (一八九一、実はこれも大分後になって知ったことなのだが) に取り付いて、結局、これが学部卒業論文となり、続いて大学院に進んでからは処女作から系統的に読み始めたのである。当時の主任教授は大和資雄博士であったが、「小英文学史」(角川書店)の著者としてのその博覧強記振りに恐れをなして、*George Eliot* 研究の古谷専三博士の指導を受けて、助手・助手の六年間 *Cissing* に埋没したのであった。古谷教授の持論は、一人の作家の研究に当たっては、その全作品はもとより、書簡・日記の類迄すべて読破すべきで、然も、一字一句ゆるがせにせず、十分に時間を掛けて作家の真髓に迫るべしと言うもので、御自身の博士論文も難解で有名な *George Eliot* の全作品を克明に読破しての、約七百頁に亘る英文による緻密な労作であった。今尚想い出すその緻密振りの一例として、*George Eliot* の代表作と謂われる長篇の、主人公を初め

重要な人物すべてに関して、その人名を固有名詞で作家が書いた場合と代名詞で表した時との *nuance* の相違を、*context* に沿って何千回もの例を挙げて論じられたことであつた。「作品を完全に読み解くことこそ文学研究の王道である」との信念に従って、我々若輩の助手・助手連中を読書会等で鍛えて下さったことが、その後、半世紀近くもの間、弟子達の研究方法に浸透して居るのである。

武蔵野女子大学に移った二十代の終わりの頃御指導頂いたのが、*Shakespeare* 研究で高名な本多顕彰博士と、アメリカ文学全般特に *Walt Whitman* の研究者として知られた吉武好孝博士であつた。この御二人はすべての点で対照的な方々で、禁欲的な本多教授に較べて、生活 *enjoy* 派の吉武教授の方が近付き易かった故もあって、研究は楽しくやらなければ続かないと言う哲学を教えこまれたのであつた。昭和五一年 *Cissing* の長篇八篇と、初めての海外留学で調査した作家の *Eng-*

land・France・Italy」の足跡をその文筆活動の経過に沿って辿った論文二篇を加えて、「ギッシング研究序説」(桐原書店)として上梓し、続いて、昭和六十二年作家の中期と後期前半の九作品の実証的研究を「続ギッシング研究序説」(株デイグ)として出版した直後、実証研究の師古谷専三先生と、私事ながら母を失ったことは、未だ記憶に新しい事実である。その後平成三年に札幌の静修女子大学人文・社会学部創設に参画し、平成九年三月学部長として才一回生を送り出した処で、縁あって札幌大学文化学部奉職したのであるが、その間にはGissingの小説技法を克明に追求する論文を遂年には発表し続け、その内の十一篇の論文を幸運にも札幌大学出版助成制度の助けを借りて、平成十年春に刊行の運びとなったのである。その末尾の論文こそが、これからの自分自身の研究の方向転換の *stepping stone* たるべき *feminism* の研究の才一作目で、一年半程前に文化学部創設に当って初代学部長を引き受けられた山

研究ノオト——「抱負」も交えて

口昌男先生に御眼に掛かり、四十年に亘って営々と積み重ねて来た一作家の実証研究と言う方法が、現在では通用せず、先生年来の *slogan* である「比較文化」との接点を見出すことこそが急務であることを知らされて、年来の研究を踏まえて方向転換をするための *theme* として、先ず、才十九世紀後半の英国の「女性解放」の問題に着目し、弟妹の教育に熱心だった *Gissing* が「教育なくして女性の解放はあり得ない」と断言した点に注目して、二人の妹達の教育の実際的な方法の確認から始めて、同時代の婦女子の解放問題に徐々に手を伸ばし、併せて、彼の作品に出現する、所謂、*“emancipated women”* との関連も洗い出して、一方では、残された二篇の長篇と *Italy* と *Greece* への紀行文の実証研究を続けて自分なりの全作品の完読と言う目標に向けて進みながら、同時に *feminism* の問題へと研究の幅を拡げて行くことを決意して居るのである。